

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 25 年 6 月 6 日現在

機関番号：12102

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2010～2012

課題番号：22520168

研究課題名（和文） 年代記類の生成と『源氏物語』注釈所引の歴史記述に関する研究

研究課題名（英文） Research on the Formation of Japanese Medieval Chronicles and the Historiographies quoted in the Commentaries on *the Tale of Genji*

研究代表者

秋山(吉森) 佳奈子 (AKIYAMA (YOSHIMORI) KANAKO)

筑波大学・人文社会系・准教授

研究者番号：10302829

研究成果の概要（和文）：

『源氏物語』全巻注釈の早い例である『河海抄』（四辻善成著、南北朝期の成立）をとりあげ、そこに引用される膨大な歴史記述に注目し、現代では常識となっている、作品の内容を理解するためという、注釈に対する認識を相対化するような特質について考察した。具体的には、物語の注釈が史実によってなされることについて、同時代の私撰国史生成の現場とのかかわりを見、六国史後、正史を持たなかった日本において、歴史認識はどのように構成されていったかという問題をかかわらせながら研究した。

研究成果の概要（英文）：

I have dealt in this project with *the Kakai-sho*, written by Yotsutsuji Yoshinari and edited in the Period of Northern and Southern Courts. This work is known as an early commentary on the whole volumes of *Tale of Genji*. First, I have tried to clarify this commentary's special quality, which tends to make relative such a general recognition in recent years that a commentary is written for comprehension of a work. I have also examined the problem how was constructed the historical recognition in medieval Japan where the official history did not exist after the Six Chronicles had been compiled by imperial order.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2010年度	1,300,000	390,000	1,690,000
2011年度	900,000	270,000	1,170,000
2012年度	800,000	240,000	1,040,000
年度			
年度			
総計	3,000,000	900,000	3,900,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文学・日本文学

キーワード：古代文学、『河海抄』

1. 研究開始当初の背景

『河海抄』については、近時、日本の国内

外を問わず、その思想的な価値が注目されており、たんに『源氏物語』注釈書としての

意義、価値に関するものにとどまらない総合的な研究が俟たれる状況にあった。研究代表者は、すでに単著『『河海抄』の『源氏物語』』（2003年、和泉書院 第6回紫式部学術賞受賞）を公刊するなど、この書にかんして精力的に研究を行っており、その過程で、『源氏物語』注釈書が、年代記類を中心とする同時代の歴史認識の形成をうかがわせる生きた資料であることに留意するようになった。その成果が歴史学の分野からも注目、引用されるようになるに至り、さらに総合的、発展的な研究を行うべく本計画を企図した。

2. 研究の目的

従来の日本文学研究において『源氏物語』の注釈書類は、文字通り『源氏物語』をよみ、理解するための助けとして用いるものと見做され、必要に応じ部分的に参照されるにとどまり、その全体像や思想的意義の大きさについては留意されることがなかった。また一方で、歴史学研究では、物語作品である『源氏物語』とその注釈書が研究対象とされなかった。そのような研究状況にあつて、研究代表者は、『源氏物語』を成り立たせた知の系譜という視点で、『源氏物語』注釈史に注目し、斬新な方法論を提示し続けてきており、本研究課題においても、虚構の物語作品の享受史が同時代の歴史記述の形成に深くかかわっているという独創的な見通しに基づき、資料の文献学的な精査と併せ、発展的に研究を継続することで、日本文学、日本歴史、日本思想史の各分野に新たな視点を提示することをめざす。

単著書における主要テーマである平安時代末から近世にかけての人々の知の現場として『源氏物語』注釈書類を捉え直す、ということについて、文献学的な問題、学問の枠組みの問題も含め、より広汎な展望によって、文化の継承、および歴史認識一般に対する新た

な視座の提起を試みる。

あわせて、これまで、善本はないといわれ、たち遅れている『河海抄』の諸本研究を行う。完成後も筆者四辻善成が手をいれつづけたという事情が、従来の伝本研究ではネガティブに認識されてきたが、それが中書本、覆勘本という『河海抄』の諸本分類に対して、問いなおしをもとめることとなっている状況を指摘、これをあきらかにすることを試み、文献学的研究を前進に向かわせるよう努力する。

3. 研究の方法

本研究課題の研究の方法について、総括すると、以下のようになる。

A 中世の思想史的な状況にかんする基礎的研究。

B 学問、教養の枠組みの継承にかんする文献学的方法による研究。

C 歴史記述の方法と、その背後にある思想的な状況にかんする基礎的研究。

さらに具体的にのべる。

Aについては、『河海抄』と同時代の私撰国史について考察する。『河海抄』に見られる傾向として、起源への興味、初例探求への志向を指摘することができるが、それは同時代の私撰国史の記述の特質としても認められるものである。中世のひとつの歴史認識の傾向といえることができるが、それが、『源氏物語』の史実化、先例化にどのようにかかわってゆくかを考察する。

Bについては、本研究計画で中心的に取り上げる『河海抄』について、文献学的研究を行う。伝本間の異同がはなはだしく、善本がないという理由で諸本調査、研究が立ち遅れる傾向にあるが、研究代表者は、その複雑な伝本状況が生ずることになった原因として、中世の歴史認識の問題が深くかかわっているという見通しを得ており、これまで奥書や書写者の書きいれの有無から系統立てられていた

所謂中書本、覆勘本の問題、とくに覆勘本のありようにかんして、新たな視座の提示の可能性を展望している。伝本の具体的な調査を行いながら、研究のための基礎作業にとどまるのではない、文献学的にも斬新な方法論を提案することをめざす。

Cについては、平安末から中世、『源氏物語』が、その注釈を通して、虚構の物語としてではなく、依拠すべき先例と見做されるようになり、史実と同列のものとなっていったことについて、研究代表者がこれまで行ってきた平家時代の文化をはじめとする後の時代への顧慮をさらに発展的に進め、天皇による『源氏物語』注釈書である『仙源抄』等も視野におさめながら研究してゆく。

ここでは、歴史記述の例から検討した問題を、『源氏物語』注釈書の側からも、包括的、総合的に考察し、歴史認識が構成される現場を思想史的に問う。

以上三点に基づき研究を行う。

4. 研究成果

本研究課題における研究成果は、以下に記す論文四件である。

「光源氏と内覧」は、研究目的Cに記した研究の成果である。

明石から帰京した光源氏は、権大納言となり、濔標巻で内大臣となる。冷泉朝の実権は、亡くなった彼の正妻葵上の父の摂政太政大臣と光源氏、二人でわけもった。この状況を『河海抄』は「執政臣二人」ということで問題とし、史上の例として藤原時平・菅原道真をあげる。その理解の基盤に、時平・道真を初例と捉える中世の内覧認識があったことをうかがわせる注をつけている。その理由は、『河海抄』が内覧という言葉の注の中に載せる花宴巻のふたつの注を見あわせるとあきらかである。右大臣邸の藤花宴で、略装の光源氏の美しさをいう場面の注で、『河海抄』

のみが『源氏物語』より一五〇年近く後の藤原頼長の例を挙げることは、内覧、装束、ふたつの問題にかかわる。

内覧の問題について。頼長は、同じ注に引かれている藤原忠実の二男で、関白である兄忠通と、内覧として並び立っていたことがあり、また忠実と忠通にも同様の時期があった。それらの先例がもためられる中で時平・道真が内覧初例となってゆく状況が、年代記類の記事からうかがわれる。

装束の問題について。一条兼良『桃花薬葉』に、『源氏物語』が史上の実例と並んで挙げられているところがあり、日常、現実に近いところでこの物語が先例であったと推測される。『河海抄』花宴巻の注は、装束の問題として『源氏物語』を先例と見做す『桃花薬葉』のような認識を共有しながら、さらに、位地の問題として例を捉え直している。

濔標巻の、光源氏と左大臣による「執政臣二人」という状況は、花宴巻を承け、実現した聖代で、これについて、史上の例を挙げて注する中で『河海抄』は、年代記類を中心とする歴史記述生成の現場と接点をもつ。それは、『源氏物語』がどのような空間の中に生きていたかという問題なのである。

以上のように、光源氏の内覧に注目し、中世の私撰国史における内覧の扱いと見あわせながら、『源氏物語』が史実化される現場をあきらかにすることを試みたものである。

「『源氏物語』と平家のひとびと」は、研究目的Cに記した研究の成果である。

研究代表者は、これまでも、平家文化のなかで『源氏物語』がどのように捉えられてきたかについて具体的に研究をかさね、その成果は歴史学の分野からも注目されてきているが(高橋昌明『平清盛 福原の夢』2007年等)、本論文は、『源氏物語』が、歴史書を編むことなくあわただしく滅亡に向かった平家のひ

とびとにとって、理想の歴史となってゆく道すじを具体的に見届けようとしたものである。

「『河海抄』の「万葉」」は、研究目的AおよびBに記した研究の成果である。

『河海抄』が、『源氏物語』の仮名の本文に対して、漢字をもって注していることを、「万葉」に注目して考察したものである。

『源氏物語』中の言葉に、「万葉」として漢字を掲出した場合、それが『万葉集』の歌によることを確認するために歌があげられており、引歌の指摘とはいえない。『河海抄』の「万葉」は、『源氏物語』の表現に関する注ではなく、理解のしかたの問題であった。

和語の理解のために漢字を示す注は、『異本紫明抄（光源氏物語抄）』、『紫明抄』にも見られるが、『河海抄』で用例数が増え、典拠が記されるようになる。『河海抄』の「万葉」は、古い言葉を伝える由緒を示すとともに、『万葉集』原文（漢字）が、『源氏物語』の言葉（和語）を理解するためのものとしてあり、歌は必ずしも『万葉集』から引かれなくてもよかった。

それらは「万葉」として示されることに意味があり、実際の『万葉集』には見られないものもふくむという点で、「日本紀」の注と同様であったが、『日本書紀』そのものによっていないと見られる「日本紀」に対し、「万葉」の場合は、訓別行の、所謂次点本の『万葉集』を見ていたと推測される点で状況が異なっている。

『河海抄』の「万葉」という方向から検討することで、わかってくるこの時期の『万葉集』の問題があると考えられる。同時に、『河海抄』の作った広がり、『万葉集』にない「万葉」、『日本書紀』にない「日本紀」は、室町時代の辞書の世界ともかかわってゆく。『河海抄』の『源氏物語』が生きていたのはそのような空間のなかにならったことについて考

察した。

仙覚によって『万葉集』研究の基礎作業が行われた後、具体的に『万葉集』がどのように生きていったかを問い、さらにその軌跡が、京都、鎌倉、ふたつの文化圏における『源氏物語』享受の状況を具体的にあらわしだすものであることを研究した本論文の視座の斬新さは、『万葉集』研究、『源氏物語』研究双方から高い評価を得た。

「字書の出典となる『河海抄』」は、研究目的AおよびBに記した研究の成果である。

先掲「『河海抄』の「万葉」」の研究を進めるなかで、『河海抄』が、さまざまに伝わる『節用集』や、『運歩色葉集』等のような中世の字書類に出典となってひろがってゆく状況に気づいたことから、さらに発展的にすすめた研究である。

この論文の研究をとおして、字書類の出典となった『河海抄』が、さらに、近世の重宝記類や、貝原益軒による啓蒙的な著書のような、庶民が手にするものへもひろがってゆく状況をたしかめ、『源氏物語』注釈書研究であることにとどまらない思想史的な視座を得るに至った。

これらの成果が注目されたことにより、現在研究代表者は、中国長春理工大学文学院比較文化研究所から、『源氏物語』注釈史にかんする論文執筆の依頼をうけ、そのための研究に着手している。いうまでもなく『源氏物語』は、日本古典文学のなかで最も多くの言語に翻訳されて世界各国に読者を得ている作品であるが、本研究課題の研究に対する評価、反響をつうじて、享受の歴史と不可分である『源氏物語』のなりたちの特質に注目がされ、注釈史が顧みられようとしている状況をいっそう実感することになった。このように、わが国の文化的な資産がグローバル化された世界の学問レベルで注目を集めようとする現状に

あって、入念な基礎研究に支えられた独創的な視座を示すのは重要な責務であることに對して十分な貢献をし得たと確信するものであり、さらなる研究継続をめざす。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 4 件)

1. 吉森佳奈子、「字書の出典となる『河海抄』」、査読無、日向一雅編『源氏物語の礎』、270-289 ページ、2012 年
2. 吉森佳奈子、「『河海抄』の「万葉」、査読有、『国語国文』(京都大学文学部国語学国文学研究室)、第 81 巻第 1 号、20-36 ページ、2012 年
3. 吉森佳奈子、「『源氏物語』と平家のひとびと」、査読無、『別冊太陽 平清盛 王朝への挑戦』、134-140 ページ、2011 年
4. 吉森佳奈子、「光源氏と内覧」、査読有、『国語国文』(京都大学文学部国語学国文学研究室)、第 79 巻第 4 号、20-34 ページ、2010 年

6. 研究組織

(1) 研究代表者

秋山 (吉森) 佳奈子 (AKIYAMA (YOSHIMORI) KANAKO)

筑波大学・人文社会系・准教授

研究者番号：10302829